

---

ちびまる子ちゃんH 「さくら家の指宿旅行」の巻  
飛驒川鞍太夫

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちびまる子ちゃんH 「さくら家の指宿旅行」の巻

### 【作者名】

飛驒川鞍太夫

### 【あらすじ】

夏休みになり、旅行に行きたがるまる子。しかし、金がかかると面倒くさがるひろし。しかし家族皆まる子同様行きたがったため、さくら家は家族旅行を決行する。行先で迷ったところ、家族は鹿児島県の指宿を訪れることに決めたのであった。

その1

ここは静岡県清水市にあるさくら家。学校は夏休みとなり、まる子ことさくらもことまる子の姉、さくらさきこは居間で家族皆にこんなことを訴えていた。

まる子「ねえねえ、うちもどっか旅行に行こうよ」

お姉ちゃん「そうよ、家でただ宿題やって遊ぶだけなんて勿体ないもの」

しかし、二人の父、さくらひろしがきっぱりと言う。

ひろし「何言ってるんだ、面倒くせえ！そんなことできるわけねえだろ！第一、旅行には金がかかるんだ！そんなことに使うくらいならビールにでも使う方が得じゃねえかよ！！」

―それで得するのはアンタだけである。

しかし、二人は引き下がらない。

まる子「でもうちのクラス、みんな旅行の話で盛り上がっていたもん！海外へ飛び回る花輪くんはもちろん、たまちゃんは北海道へ行くし、とし子ちゃんは伊勢に行くし、ブー太郎は神戸へ行くんだよ。永沢なんて火事にあってそんな余裕ないと言ったときながら親戚のよしみで諏訪湖に行けるとか言ってたし、あの貧乏なはまじでさ

え、江ノ島へ連れて行ってもらえるんだよ！」

―人の家を「貧乏」呼ばわりするのは失礼である。

お姉ちゃん「うちのクラスだって、よし子さんは秋田の竿燈まつり見に行くっていったし、小山君は飛騨高山へ、根岸君は京都へ行くのよ！これじゃあどこもいかないのは私だけじゃない！」

ひろし「なら海水浴でも行きやええだろ！」

まる子「何度も行ってんじゃん！それも近くの海水浴場なんて簡単にけるじゃないのさ！」

そのとき、まる子の祖父・友蔵が動いた。

友蔵「なら、まる子、お姉ちゃん、わしが連れて行ってあげよう」

まる子「本当！？ありがとう、おじいちゃん」

友蔵「この爺にお任せあれ、今月の年金で何処へでも連れてってあげるぞい！」

そんな友蔵に祖母・さくらこだけが突っ込みを入れた。

お婆ちゃん「じーさん、無理な約束じゃないのかい？そのため年金使っちゃあ、困ってしまうよ」

友蔵「う……」

ひろし「おい、母さんから何か言ってくれ」

ひろしは自分の妻であり、まる子とお姉ちゃんの母であるさくらすみれに振った。

お母さん「でもね、私もいつも家の用ばかりでたまにはそんなこと忘れて旅行に行きたい気分になってきているのよ。お姉ちゃんともまる子の気持ちも分からなくはないわ。それにお父さんいつも釣りに行ったり、飲んできたりといつも自分のことじゃないの！」

お母さんはひろしを睨みつけた。いや、母のみではない。まる子も、お姉ちゃんも、友蔵も、祖母も彼に悪意を感じるように睨みつけていた。

ひろしは完全に追い詰められた。これではさすがにダメだなどと言う気にはなれなかった。

ひろし「う……わ、分かったよ！行ってやるよ！その代わりに、おめえらちゃんと宿題やるんだぞ、特にまる子はな！」

まる子「う、分かったよ」

お姉ちゃん「そうね、あんたいつも最後の日まで溜めるからね。だからだらして行けなくなったらあんたのせいだからね」

まる子「ちゃんとやりますよ、もう」

お婆ちゃん「それじゃあ、楽しく行っといで。私は一人で留守番させてもらうよ」

お姉ちゃん「えへ、皆で楽しく行こうって思ったのにお婆あちゃんだけ留守番だなんて可哀想だよ」

友蔵「そうじゃ、家族みんなで行って楽しむんじゃ。ばあさんもパーツと楽しもうではないか！」

まる子「そうだよ、お婆あちゃんも行こうよ！」

お婆ちゃん「そうか、嬉しいねえ・・・」

こうしてさくら家は旅行に行くことが決まった。ただ、次なる問題があった。それは行先をどこにするかである。

翌日、まる子はだらだらして過ごしていた。

お姉ちゃん「ちょっと、宿題少しでもやりなさいよ！！旅行行けなくなってもいいの!？」

まる子「うう、あーとーでー」

そのとき、出入り口にいつの間にか母がいた。

お母さん「まる子！！ドリルとかすぐに終わるものでもいいから

先にやりなさい！そんなにだらけているのなら旅行なしにするからね！！」

まる子「ええ、そんなあく、ちえ、やるしかないか」

まる子は宿題に取りかかった。が、暑さのせいでやる気が出ないのか、それとも、分からくて解けないからなのか、もっと言えばその両方なのか、なかなか集中できないでいた。

昼過ぎになり、母がまる子を呼んだ。

お母さん「まる子、たまちゃんから電話よ」

まる子「はあーい」

まる子は電話に出た。電話の相手はまる子の親友であるたまちゃんこと穂波たまえであった。

まる子「もしもし、たまちゃん」

たまちゃん「あ、まるちゃん。これから旅行のために宿題をやるうと思っぴてみんなで終わらそうと長山君の家に行くつもりなんだ。まるちゃんも行く？」

まる子「お、行く行く。」（長山君か、ならわからないところ教えてもらえるから終わらせられるかも！）んじゃ、またね」ガチャ

まる子は早速長山君の家へ出かけた。

長山家では、長山君の他、たまちゃん、ブー太郎、そしてはまじと集まっていた。

長山「やあ、さくら。みんな宿題をある程度済ませてから旅行に行く方が楽だと思ったんだ」

まる子「そうなんだ。じゃあ、あたしもやるか！」

たまちゃん「そうだ、まるちゃんはどこへ行くの？」

まる子「それがまだ決めてないんだ。昨日、お父さんと説き伏せてやっと家族で行くことが決まったばかりだね」

はまじ「そりゃ迷うよな。俺も旅行に行けると喜んだ時には母ちゃんもじいちゃんもどこに行こうか迷ってたな。まあ、あんまり遠くへはさすがに行けなから隣の県の江ノ島になったが」

長山「そうだね、僕もどこに行こうかみんなで悩んでたか、小春にとって空気がいいところがいいということで福島の会津磐梯高原に行くことにしたんだ」

まる子「そうなんだ、それじゃあどこにしようかね。よし、頑張って宿題終わせよう！出なきゃ連れて行ってもらえないからね」

たまちゃん・長山・はまじ・ブー太郎「うん！」



こうして五人は宿題を助け合った。まる子やはまじなどは分からないところを長山君に聞いて手伝ってもらおう状態にあったが、宿題を進めることができたのであった。そして気が付けば夕方になっていた。

まる子「いや、長山君のおかげでこんなに宿題ができたよ。ありがとう」

ブー太郎「本当、助かったブー」

長山「どういたしまして」

たまちゃん「みんなで宿題やると楽しくできるよね。また明日もみんなが集まっていいかな？」

長山「そうだね。じゃあ、ドリルとかの問題集はみんなで終わらせよう」

まる子・たまちゃん・はまじ・ブー太郎「さようなら」

こうして皆はそれぞれの家へ戻った。その夜、さくら家では友蔵が旅行雑誌を読んでいた。

友蔵（うーむ、特集が指宿か……。ほう、ほう！よし、ここにしよう！）

友蔵はどうやら行きたい場所が決まったようだ。そして、家族皆に伝えようとするのであった。

その2

さくら家の食卓。友蔵は自信満々に発言した。

友蔵「みんな、わしはこの雑誌を読んで旅行は指宿に行きたいと思っっているのじゃ。どうだろうか？」

全員「指宿・・・」

ほんのわずかな沈黙が流れた。友蔵はもしかしたら嫌だなどと言われるのではないかと不安に陥った。

まる子「いいねえ！そこにしようよ！」

友蔵（ま、まる子・・・）

お姉ちゃん「そうしよ、そうしよ！」

お母さん「その砂むし温泉も体にいいからね、ぜひ行ったみたいわね」

友蔵は皆が喜んでくれて心の中で感心し、心の俳句を詠んだ。

我が意見 皆に喜び 届け出る

ところが、そのときひろしが言葉を発した。

ひろし「何言ってるんだ、指宿なんて。そんな遠いところ行きたくもねえよ。鹿児島じゃねえか。九州だぞ。おい」

友蔵はガクッと落ち込んだ。が、このひろしの一言に他の皆に火をつける結果となってしまうた。

お姉ちゃん「お父さん、酷すぎるよ」

まる子「せっかくおじいちゃんが考えてくれたのに」

お母さん「じゃあ、お父さんはどこならいいの・・・？」

ひろしはまたもや家族全員に睨みつけられ、折れるしかなかった。

ひろし「わかったよ。じゃあ指宿にするか」

まる子・お姉ちゃん「やったー！！」

こうしてさくら家は指宿に行くことが決まったのであった。

翌日、まる子はたまちゃん、長山君、はまじ、ブー太郎と共に再び長山家に集うのであった。

まる子「でね、うちは鹿児島の指宿に行くことになったんだ」

ブー太郎「おお、すごいブー！」

はまじ「結構遠いところに行くじゃねーか、なんかさくらが羨ましいぜ」

たまちゃん「よかったね、行くところが決まって！」

長山「指宿は砂むし温泉が楽しめるんだってね」

まる子「うん、うちのお母さんがとっても楽しみにしているんだ」

長山「他には近くに開聞岳という山や錦江湾の知林ヶ島とか、色々な観光スポットがあるよ」

まる子「おっほー、ますます楽しみになってきたなく」

五人は必死に宿題を終わらそうと協力し合った。そして二日後・  
・。

はまじ「ふう、終わったぜ・・・」

ブー太郎「これでドリルは全部終わったブー。あとは読書感想文、自由研究、絵日記だなブー」

まる子「ああ、宿題をこんな早くから初めて終わらせるなんて、あたしゃ初めてだよ・・・」

たまちゃん（まるちゃん、今までずっと最後の日まで溜めていた

んだ・・・)

長山「よし他の宿題は各自でやるということにしようか」

まる子・たまちゃん・はまじ・ブー太郎「うん！」

はまじ「みんな俺のお土産楽しみにしてくれよ！」

ブー太郎「おいらのもブー！」

たまちゃん「私も！」

まる子「あたしも！」

長山「じゃあ、新学期になったらみんなでお土産交換会とするか」

こうして一定の宿題を終え、皆は各自の旅行を楽しみにそれぞれの家へと帰って行くのであった。

そして、旅行の前日となった。まる子とお姉ちゃんは旅行の準備をしていた。

まる子「ねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんは指宿で何がしたい？」

お姉ちゃん「そうね、私もお母さんと同じ砂むし温泉でリラックスしてみたいわね」

まる子「あたしゃ、開聞岳とかいうところをこの目で見てそしてあの無人島行きたいね、えくと、なんていうんだっけ？」

お姉ちゃん「ああ、知林ヶ島のこと？」

まる子「そうそう、その知林ヶ島に行きたいんだよね」

お姉ちゃん「あんたもよく知ってるわね」

まる子「長山君から聞いたんだ。あと名物の湯たまらん井にそら豆のスイーツとかも是非口にしたいね！」

お姉ちゃん「あんた食い意地張っているね・・・」

まる子「アハハ・・・お休み」

旅行を準備を終えたさくら家は明日を待ち遠しく思っていた。





旅行当日となった。なお、当時の交通状況については静岡空港が存在せず、空路で鹿児島へ行くには一旦東京へ出て、羽田空港から乗り継がなければならなかった。なお、鉄道においても九州新幹線は未開業、山陽新幹線も当時は岡山までしか走っておらず、そこから西は整備中であった。清水から指宿に行くには、東海道線浜松駅（当時は静岡駅は通過していた）から寝台特急「富士」で西鹿児島駅（現在の鹿児島中央駅）まで行き、指宿枕崎線に乗り換えて指宿へ向かうというルートが一般的で妥当であった。

。。  
さくら家は寝台特急で鹿児島県へと向かっていた。その朝方・

まる子「ふえく、早く着かないかねえく」

まる子は列車の中で待ちくたびれていた。

友蔵「まる子や、こういう時は窓から外を眺めると楽しい気分になるんじゃないよ」

まる子「ええく退屈だよ」

友蔵はこの一言でショックを受け、気が抜けてしまった。

列車が西鹿児島駅に着いたのは夕方になった。さくら家は指宿枕

崎線に乗り換えて指宿に向かった。指宿駅に着いた時には夜7時をすでに超えていた。

さくら家は歩いて旅館に向かった。

まる子「お父さん、いつになったらつくの・・・？」

ひろし「うるせえ、もうすぐだ！それまで我慢しろ！」

まる子「タクシー使えばいいのに・・・」

ひろし「何言ってるんだ、こんな歩いて10分の距離なのに金もつたいねえよ！」

そして、そんな会話の2、3分後、家族は予約した旅館に到着した。入口には仲居の男性と旅館の制服とされる着物姿の女性従業員が3名出迎えて「ようこそおいでくださいました」とお辞儀した。

ひろし「ろ、六名で予約をしていたさくらと申します・・・。」

白川「ようこそいらっしゃいました。この旅館の仲居の白川と申します。どうぞごゆっくりお過ごしください。矢崎、部屋を案内して差し上げてくれ。」

矢崎「はい」

さくら家は矢崎と呼ばれた女性の係員に部屋まで案内された。

まる子「ふう、やっとのんびりできるね」

お母さん「それじゃあ、早速お風呂と行きましようか」

友蔵「では、行こうか」

家族は浴場へと向かうのであった。女湯では……。

お姉ちゃん「明日は待ちに待った砂むし温泉……！待ちきれないわね〜」

まる子「お姉ちゃんもお母さんもそういうえば楽しみにしてるよね。まる子もいいかな〜？」

お母さん「あら、いいと思うわよ」

おばあちゃん「それじゃあ、皆で体験とするかね」

一方男湯では……。

ひろし「ふえ〜疲れた。出たらビールを浴びるほど飲むぞ」

友蔵「何を言うんじゃ。お前の楽しみはビールしかないのか」

ひろし「旅館の飯といや、ビールだろ」

友蔵（まったく、情けないのう・・・）

友蔵は心の俳句を詠んだ。

いずこでも 息子の頭 ビールのみ

風呂から出た皆は食事のため、広間へと向かった。

まる子「んん、どれもおいしいねえ」

お母さん「海の幸も山の幸も色とりどりねえ」

ひろし「うへ、旅館のビールは最高だぜ」

ビールに酔いしれるひろしに対して姉妹はぶつぶつと愚痴った。

まる子「お父さんめ、一番行くのめんどくさがってたくせにビールでこんな楽しんじゃってさ」

お姉ちゃん「ホント、うちにいても飲んでるくせに」

まる子「全くわからない人だねえ」

翌日、家族は砂むし温泉の会館へと向かった。

まる子「さて、砂むし温泉ってどんなものなのかね」

友蔵「そうじゃのう、わしも入ろうかのう」

ひろし「へん、砂なんかかけられて気持ちいいもんかよ」

まる子「あんた嫌なこと言うね・・・」

ひろし「俺は温泉のみで結構だ」

友蔵「それじゃあお願いしよう」

友蔵は受付の係員に話しかけた。

友蔵「こんにちは、大人4人、子供2人お願いいたします」

係員「はい、全員砂むしをご利用になりますか？」

友蔵「いえ、この者だけは温泉のみのご利用です」

係員「わかりました、こちらが浴衣とタオルになります。脱衣所で浴衣にお着換えていただき、タオルをもって海岸へ向かってください。では、砂むし温泉をお楽しみください」

全員「ありがとうございます」

ひろしを除くさくら家全員は浴衣に着替え、砂むし場に向かうのであった。

海岸で五人は体に砂をかけられて砂むし温泉を満喫している。

お姉ちゃん「ふう、汗がどんどん出て来るわね・・・」

お母さん「日頃の疲れを取っていくってこういう事なのね・・・」

10分ほどたったのち・・・。

まる子「あちち・・・おじいちゃん、このままどっちが長く耐えられるか勝負だね」

友蔵「よし、まる子、わしゃ負けんぞ」

お姉ちゃん「二人とも、のぼせても知らないわよ」

まる子「大丈夫、大丈夫・・・ってもうだめ、耐えられない・・・」

友蔵「わ、わしも・・・」

おばあちゃん「じーさん、年なんだから無茶するんじゃないよ」

五人は砂を落として浴場へ向かった。



その4

そのころひろしは一人で浴場にいた。

ひろし（ええ湯だなあ、やっぱり俺も入れればよかったかなあ・  
・いやいや、砂をかけられるのはごめんだ）

その時友蔵がやって来た。

友蔵「おう、ひろし。砂むし風呂は楽しかったぞい。お前も入れ  
ばよかったのに」

ひろし「いいんだよ、俺は元々行く気なかったんだからよ」

ひろしは開き直ってしまった。

一家は温泉を終えた後、喫茶コーナーで昼食の時間になっていた。  
昼食は湯たまらん丼を食べることにしていた。

まる子「これが湯たまらん丼かく、どれ・・・んく、この温泉  
たまごとご飯におかずと味が上手く合わさっているねえ、美味しい  
・・・」

友蔵「んん、なかなかの味じゃ、まる子、来てよかったのう」

まる子「ありがとう、おじいちゃん」



友蔵は孫に感謝されることに非常に嬉しく感じていた。

お母さん「それじゃあ、次は龍宮神社に行ってみようかしらね」

まる子「賛成く！」

昼食を食べ終わったさくら家は龍宮神社に行くのであった。

友蔵「この龍宮神社はの、海幸彦と山幸彦の神話に出てくる豊玉姫を祀っているんじゃないよ」

まる子「おじいちゃん、よく知ってるね」

友蔵「えっへん、わしはここについては物知りだからのう」

「雑誌を読んで覚えただけである。

まる子「んで、ウミサチヒコとかヤマサチヒコとかトヨタマヒメとかってどんな人なの？」

友蔵「う・・・」

おばあちゃん「まる子や、海幸彦は海で釣りをするのが得意な人で山幸彦は山で狩りをするのが得意な人で二人は兄弟なんじゃよ。ある日二人はお互い反対のことをやろうとしたら山幸彦はお兄さんの釣り針を失くしてしまっただけのう、探してこいと言われてどう見つ

けようか困っていたんじゃよ。そしたら塩椎神という神様に出会ってわたつみの宮という宮殿に連れて行ってもらえるのじゃ。そしてそこで豊玉姫という人と出会ってそこで楽しく暮らし、ついには結婚するんじゃよ。3年たった後、釣り針が見つかったので山幸彦は帰ることになって、そのとき豊玉姫は『もしお兄さんが意地悪をしたらこの潮満玉を海につけておぼれさせるのです。そして許しを請うたら潮乾玉で海を沈めなさい』といったんじゃ。帰って海幸彦に釣り針を返そうとすると海幸彦は信じてもらえず意地悪をふるうんじゃ。山幸彦は豊玉姫が言った通りのことをして海幸彦にもう意地悪はしないと約束させる、という話じゃよ」

まる子「いいねえ、あたしも山幸彦のようなことをして意地悪なお姉ちゃんを懲らしめてやりたいよ・・・」

お姉ちゃん「何ですって・・・!!」

まる子「い、いや、そ、その・・・」

「逆に自分が姉に懲らしめられるまる子であった。

友蔵「せっかくここまで来たんじゃ。次は長崎鼻に行ってみようかの」

さくら家は長崎鼻へ向かうこととした。その道中・・・。

まる子「ん？これは何々・・・。浦島太郎の像だって！ここは浦島太郎も祀っているのかな？」

友蔵「そうじゃ、長崎鼻は浦島太郎が竜宮城へと旅立った岬という言い伝えがあるんじゃ」

まる子「おおく、こりゃその長崎鼻に行かないと損するねえ！」

こうして一家は長崎鼻についた。

お母さん「うくん、いい風吹いてるわね」

お姉ちゃん「ここが薩摩半島の最南端か、ん？向こうにあるのは島？」

お母さん「あれは屋久島や三島ね。晴れる日には島影も見えるのね」

まる子「島も見えるっていい眺めだね。浦島太郎はここから竜宮城に行ったのか。いいところに住んでたもんだね」

「言い伝えと現実を混同しているまる子であった。」

旅館に戻った一家はその夜……。

ひろし「あ、今日も鹿児島島のビールは上手い！」

お母さん「お父さん、あんまり飲みすぎないで下さいよ」

まる子「まったく、お父さんはビールしか楽しみがないのかな」

お姉ちゃん「そういえば一人だけ砂むし温泉に入らなかったもんね」

友蔵「元から行きたくなかったというとったしのう」

お姉ちゃん「最低ね・・・」

まる子「うん・・・」

ービールに溺れる父親の姿を軽蔑した目で見るまる子とお姉ちゃんであった。

ひろし「おかわり持ってこーい!!」



その5

さくら家はこの日はまる子が行きたいと言っていた知林ヶ島に行くことにしていた。

ひろし「お、潮が引いてるな」

まる子「これなら歩いていけるね！」

一家は砂州を歩いて島へ渡った。

友蔵「この知林ヶ島はこの潮が引いているときに陸とつながる島になるからな、『縁結びの島』とも呼ばれているんじゃないよ」

まる子「縁結びか、いいねえ、あたしも将来いい男と出会えるかな」

お姉ちゃん「私もヒ〇キと結ばれたい」

お姉ちゃんは急に空想に耽った。

ヒ〇キ「さきこ、僕は君と一緒にになりたい・・・」

お姉ちゃん「ああ、さきこ感激～～～！！」

―姉の空想に何も言えない家族一同であった。

まる子「お、お姉ちゃん、行くよ・・・」

家族は島を周遊をすることとなった。

友蔵「展望台まで行ってみようかの」

まる子「いいね、そうしよう」

家族は展望台目指した。しばらく歩いて・・・。

まる子「ふう、やっと着いたく、ここが展望台だね」

友蔵「そうじゃよ、錦江湾がいっぱいに見渡せるぞい！」

まる子「おお、見たいみたい！」

家族は展望台から見える錦江湾眺め。

お母さん「ここから見る錦江湾もいい景色ね」

お姉ちゃん「あ、開聞岳も見える!!!」

まる子「錦江湾に開聞岳、まさに指宿の特産物だねえ・・・」

―特産物ではなく名所である。

一家が展望台から帰ろうとしたところ・・・。

まる子「んん？募金箱があるよ」

お姉ちゃん「『恋人や家族、友人達と絆を深める幸せな気持ちをこの募金箱に分けていただくと幸いです』だって」

まる子「せっかくだから募金してあげようよ」

お姉ちゃん「そうね、せっかく縁結びの島に来たんだから、皆とこれからも一緒にいたいという気持ちを示さなきゃね」

ひろし「やめろ、金がもったいねえ。第一、この旅行にだって金使ってたんだぜ。これ以上出せるかよ」

まる子「冷たい人だねえ」

お姉ちゃん「ホント、孤独死しても知らないよ」

ひろし「なんとも言え」

お母さん「じゃあ、皆で少しずつ募金しようか」

家族はそれぞれ募金を行った。お母さん、友蔵、おばあちゃんは100円、まる子とお姉ちゃんは10円、ひろしは全く出さなかった。



まる子「島を歩き回ってお腹すいたね」

お姉ちゃん「そうね、戻るか」

友蔵「それでは池田湖の方まで行ってそうめん流しを楽しもうではないか」

まる子「そうめん流し!?!」

お母さん「いいわね、それ」

お姉ちゃん「楽しみになってきちゃった」

まる子「あたしも!」

こうして一家は島を出て池田湖へと向かうことにした。

その途中……。

おばあちゃん「じーさん、あんたよく知っとるねえ。さすが雑誌をよく読んだんだね」

友蔵「え、なんでわかるんじやい!?!」

おばあちゃん「だって旅行雑誌に指宿の特集が載っていたじゃないか。それで指宿に行きたくなったんじゃない?」

友蔵「はは、バレたか・・・」

おばあちゃん「でもじーさん、あたしもこの旅行は結構楽しんだよ。決めてくれてありがとな」

友蔵「ばーさん・・・」

一家はタクシーを拾い、池田湖へ到着した。さくら家はそうめん流しを楽しみ、食べていた。

まる子「んん、美味しいねえ。流しそうめんは竹筒で流すだけじゃなくて、回しても美味しいねえ」

友蔵「まる子や、鹿児島では『流しそうめん』ではなく、『そうめん流し』と呼んでいるんじやよ。竹筒で流すのを『流しそうめん』と言うんじやが、『そうめん流し』はそうめんを回すところが違うんじや」

まる子「へえ」

そうめん流しを楽しんだ家族は池田湖を眺めていた。

お姉ちゃん「池田湖は綺麗ねー」

お母さん「天然記念物の大うなぎもここに住んでいるのね」

まる子「うなぎか・・・、小杉だったら食べようとして泳いで捕まえようとするかもね」

お姉ちゃん「あ、あんたね・・・、いくら小杉でもそれはないと思うよ・・・」

友蔵「ここにはネス湖のネッシーにちなんでイッシーという謎の生物がいるという噂があるんじゃ」

まる子「本当!? おーい、イッシー!!!」

友蔵「イッシー!!!」

ひろし「バカだな、声で読んだって出てくるわけねえだろ」

まる子「わかんないよ!? いないと決まったわけでもないし! イッシー!!!」

友蔵「イッシー!!! 出てこーい!!!」

おばあちゃん「じーさん、いい年してみっともないよ」

まる子と友蔵は必死で叫んだがイッシーが出てくることはなかった。

池田湖を眺め終わったその後、さくら家はお土産をかうことにした。

ひろし「おう、指宿焼酎の利右エ門だとよ！こりゃ買わなきゃ損するぜ！」

まる子「あたしゃこのうなぎパイにしよう。クラスのみんなへのお土産にするんだ」

おねえちゃん「私はこの薩摩芋タルトにしようっと」

お母さん「2人ともいいお土産選ぶわね。お母さんは知覧の農場で収穫されたお茶を買おうかしら」

友蔵「おーい、みんなー」

まる子「おじいちゃん、何買ったの!？」

友蔵「黒毛和牛じゃ！お母さん、帰ったらこの黒毛和牛ですき焼きにしてくれんかの」

まる子「おじいちゃん・・・、夏にすき焼きなんて暑くて食べられないよ・・・」

お姉ちゃん「焼き肉とか、牛丼とかなら何とかなると思うけど・・・」

友蔵は空回りした感があったって落ち込んでしまった。

お母さん「いえ、いえ、おじいちゃん、ありがとうございます。  
こんな高級なお肉、減多に食べられないから楽しみよね!!」

まる子・お姉ちゃん「うん！」

まる子「おじいちゃん、ありがとう」

友蔵「まる子・・・」

まる子「ん、おばあちゃんはお湯呑みとお茶碗だね」

おばあちゃん「ああ、この湯呑みと茶碗はね、鹿児島で作られた  
薩摩焼のものなんじゃよ。薩摩焼には2種類あってね、この湯呑み  
は白薩摩だから白くて、茶碗は黒薩摩だから黒いんじゃよ」

まる子「へへ、高価そうだね」

買い物を楽しんだ家族は旅館へと戻るのであった。その夜・・・。

お母さん「あんたたち、明日は出発早いからね、寝坊したら帰りの  
列車に乗れなくなるから気を付けるのよ」

ひろし「おう、とくにまる子は寝坊しやすいからな」

まる子「はいはい、気を付けますよ・・・」

こうして家族は翌日、泊まっていた旅館を後にすることとなった。

白川「この度は当旅館をご利用いただきましてありがとうございます  
ました。また、指宿においでください」

さくら家一同「ありがとうございました！」

こうしてさくら家は清水へと帰るのであった。

その6

さくら家は帰ってきた。

まる子はこの指宿の旅行の日々を宿題の絵日記に書いた。これはいい内容になると自分で喜んでいたのであった。

2日後の夕食・・・。

お母さん「今日のご飯はおじいちゃんが買ってきてくれた黒毛和牛で牛丼にしてみちゃった」

友蔵「お母さん、ありがとう」

お母さん「いえいえ、おじいちゃんもこんな高価なお土産を買っていただき、本当にありがとうございます。でもすみません、すぎ焼きじゃなくて」

友蔵「いや、いいんじゃないよ、わしは調子に乗ってただけじゃから・・・」

お母さん「そんな、それじゃ、いただきますしよるか」

家族一同「いただきますーす！」

家族は黒毛和牛の牛丼を食べ始めた。その時……。

まる子「んおお、美味しい」

お姉ちゃん「普通の牛肉とは違う味がするわね」

友蔵（まる子……。お姉ちゃん……）

お母さん「おじいちゃん、こんなおいしいもの買っていたくださ  
して本当にありがとうございます」

友蔵「いえ、いえ……」

友蔵（みんな喜んでくれている……。やっぱり奮発してよかつ  
たわわい！！）

友蔵は嬉しさのあまり心の俳句を詠んだ。

黒毛和牛 家族で食べると 美味しかな

そして時は過ぎ、夏休みは終わった。

2学期、まる子とお姉ちゃんは学校へ登校中だった。

まる子「ねえねえ、お姉ちゃんのクラスも旅行のお土産交換やる  
の？ウチのクラスはやるつもりになんだけど」



お姉ちゃん「そりゃもちろん！」

まる子「へえ、どんなお土産が貰えるか楽しみだね！」

お姉ちゃん「ふふっ、そうね・・・」

新学期初日の学校、3年4組では・・・。

まる子「おっはよー、たまちゃん！」

たまちゃん「まるちゃん、久しぶりく、指宿どうだった？」

まる子「すっごく楽しんだよ！砂むし温泉は気持ちよかったし、知林ヶ島の展望台からは錦江湾と開聞岳が見えたし、池田湖のそうめん流しを楽しんだし、いろいろあったよく」

たまちゃん「へえ、よかったねえ、北海道も涼しくて快適だったよ」

まる子「へえ、お、はまじ、おはよう」

はまじ「おお、おはよう」

まる子「江ノ島どうだったー？」

はまじ「ああ、結構いいところだったぞ。水族館行ってイルカシヨー見てきたんだぜ！で、そのときじいちゃんが『おくい、イルカ

く』って叫んでたぜ……」

まる子「はは、あんたのおじいちゃんもなかなかやるね……」

はまじ「さくらは指宿どうだったんだ？」

まる子「ああ、色々楽しめたよ！砂むし温泉、知林ヶ島、池田湖、龍宮神社……、また行きたいくらいだね！」

ブー太郎「おはようブー！」

まる子・たまちゃん・はまじ「ブー太郎！おはよう！」

たまちゃん「ブー太郎は神戸どうだったの？」

ブー太郎「海が綺麗でいいところだったブー！シーバスで神戸港をクルージングしてきたんだブー！ああ、そうそう、これお土産だブー、皆に上げるブー！」

まる子「サンキュー！クッキーか」

ブー太郎「神戸で作られたクッキーだブー。オイラも向こうで食べたけどすごい美味しかったブー！」

はまじ「へえ、そんじゃ俺の江ノ島土産はこれだぜ！」

たまちゃん「これは何だろう？」

はまじ「柿の種だぜ。イカの形がイカ味、サケの形が鮭味、カツオの形してんのがカツオ味だぜ」

たまちゃん「うわー、美味しそうだね」

はまじ「好きなのとっていってくれよ！」

ブー太郎「ありがとうブー！」

まる子「たまちゃんのお土産は？」

たまちゃん「私はこのホワイトチョコレートにラングドシヤクツキーを挟んだお菓子だよ。『白い恋人』っていうんだ」

まる子「うわあ、美味しそう！」

ブー太郎「穂波のお土産も最高だブー！」

まる子「よし、あたしの番だね。あたしはうなぎパイっての買ってきたんだ！池田湖じゃ大うなぎを養殖していてね、それにちなんだパイだよ」

はまじ「すっげーうまそうだぜ！」

お土産交換会をしているところに長山君もやって来た。

長山「やあ、早速お土産交換会を楽しんでいるようだね。僕からはこの薄皮まんじゅうをあげるよ」

まる子「ありがとう！長山君。あたしのお土産も是非もらってよ！」

たまちゃん「私のも！」

はまじ「俺のも！」

ブー太郎「おいらのもブー！」

長山君「どれも美味しそうだね」

そのとき……。

野口「クッククック……。私も混ぜてくれよ……」

お笑い好きの野口笑子が現れた。

まる子「あ、野口さん、久しぶり！」

野口「私、落語や漫才などお笑い見に行くために浅草いったのさ。はい、お土産は人形焼きだよ……」

はまじ「おう、サンキュー、野口！」

まる子「野口さんお笑い好きだからね、浅草は絶対行きたい場所

だよね！」

野口「その通りさ、クックック・・・」

まる子たちはお土産交換を楽しんだ。そしてお姉ちゃんのクラスでは・・・。

よし子「はい、私からのお土産は金萬っていうカステラ饅頭よ」

お姉ちゃん「わあお、美味しそう〜！私は鹿児島にちなんで薩摩芋タルトにしたの！」

根岸「二人とも美味しそうなお土産じゃないか。俺のは焼いた八橋だよ。本当は生を買いたかったんだけど賞味期限が早いからこっちにしたんだ」

お姉ちゃん「でもこっちも美味しそうだよ、根岸君、ありがとう！」

小山「それじゃ、俺からは飛驒の牛乳ケーキがお土産だよ」

よし子「小山君、ありがとう、嬉しいなあ・・・」

お姉ちゃん（フフツ、よし子さん、よかったわね・・・）

指宿に行って本当によかったと思うまる子とお姉ちゃんであった

・・・。



---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~19903](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~19903)

---

ちびまる子ちゃんH 「さくら家の指宿旅行」の巻  
2017年08月02日 20時07分発行